

安全保障と天文学

意見1

学術会議が求めるような審査制度やガイドラインの導入には反対します。

私はそもそも、学術会議声明自体に強い違和感を覚えます。2017年の声明では、反対を含む多くの多様な意見があったと聞いています。須藤氏の月報記事によれば、1967年の声明の時でも、すでに激しい議論があったといえます。「いかなる軍事研究も禁止されるべきである」という主張に、日本の全ての研究者が同意している状況とは、とても思えません。

しかしながら最終的に出てきたのは、「軍事目的の科学研究は行わない」という極めて単純で一面的な声明でした。そこには、「反対意見もあった」ということすら書いてありません。

学術会議のような権威ある組織にこのように決めつけられては、意見の異なる人はどうしたらよいのでしょうか？日本の学術界に存在することは許されないのでしょうか？

むしろ意見や意思の多様性を認め、それに基づく個人の行動の自由が保証されるように努めることこそ、学者の集まる学術団体の最も重要な役割ではないのでしょうか。一連の学術会議声明は、この学術団体の本義とは逆の方向に進んでいる印象があり、恐怖を感じています。

2017年の声明はさらに踏み込んで、審査制度やガイドラインを大学や学会に求めています。多様な意見の存在を無視するのみならず、反対意見を持つ人たちの行動の自由を実際に奪うというところまで踏み込んだものであり、深刻さが増しています。学者同士の間で他者を監視してその行動の善悪を決めさせるようなことを、学術会議が率先して促すというのは、私には理解しがたいことです。

例えば、「世界平和や人類の幸福を目指す上で、軍事がプラスかマイナスか？」という根本的な命題でも、意見は分かれるところでしょう。兵器に

よって悲惨な悲劇が生み出されることは明白な事実ですが、一方で、国際社会の秩序維持や安全保障で軍事が重要な役割を果たしているという意見もあるでしょう。様々な意見や立場がある中で、とにかく「軍事研究は行わない」と一方的に決めつけ、それを全ての人に強要するという学術会議の姿勢は、私には受け入れられません。

言うまでもなく、この問題は大変重要なことです。だからこそ、一つの正解を決めて全員に強要するのではなく、多様な意見の存在を認めるのが健全なありかたであると思います。

学術会議声明の出発点は、第二次大戦時の日本の状況に対する反省と理解しています。ですが、今の学術会議のやり方を見ていると、軍事に関する方向こそ真逆であっても、思想を強制し自由を抑制するという点において、むしろ学術会議が率先して学術界を戦時中の状況に戻そうとしているのではないかという、皮肉な状況にも見えてきます。

先の戦争について、学界として何を反省するべきなのかと言えば、私は「個人の意思に反して強制的に軍事研究をさせられるようなことがあってはならない」ということだと思います。その帰結として、「軍事研究を禁止する」という方向に踏み出してしまったのが、学術会議のそもそもの誤りであったと考えています。

この反省にもとづいて学界として掲げるのは、むしろ「学問の自由」であるべきだと思います。例えば、「学者には自らの研究テーマを自分で選ぶ権利があり、国家権力によって強制的に特定の研究をさせられるようなことは断固拒否する」という主張であれば、今の学術会議声明よりはずっと多くの賛同が得られることでしょう。

結局のところ、今の議論が捻れてしまっている根本の原因は、学術会議が反対意見を抑えて強引に「軍事研究はしない」と宣言してしまい、それに束縛され続けていることにあります。これを撤回し、この点に関して多様な意見や立場があるという原点に立ち戻らなければ、健全な議論にはならないでしょう。

結論として、私は学術会議声明を踏襲する形でガイドラインや審査制度を

設けることには、内容の如何に関わらず反対します。

天文学会としての対応については、「特に対応せず、放置する」というのでよいと思っておりますが、もし、声明を出すなどのアクションをとるといふ話になるのであれば、以下のような内容であれば賛成します。

- 学術会議声明に盲従するのではなく、同声明は多様な意見を否定して一面的な考えを押しつけていること、さらにガイドラインや審査制度は一部の研究者の自由を侵害する恐れがあることを批判する。あるいは、少なくともそういう声があることを明記する。
- 第二次大戦における我が国の状況に対する学術界の反省としては、「軍事研究の禁止」ではなく、「学問の自由」を主張する。

2018/04/08 20:25